

地方自治ここにあり 首長インタビュー

対話を大切にする町政を

若者のアイディア

高齢者の経験

生かすまちづくり



久留米啓史日高川町長

日高川町 久留米 啓史 町長

和歌山県地域・自治体問題研究所では、年2回（原則）和歌山県内の町村長を訪問して、地域の課題とまちづくりについて本音のお話をお聞きしています。シリーズ「首長インタビュー」今回は、今年5月に行われた町長選挙で、無投票で初当選を飾った日高川町長久留米啓史さんにお話を聞きました。インタビューは当研究所の鈴木裕範理事長です。

「私たちを忘れないで」 胸に響いた奥地住民の声

鈴木：当選後のインタビューでは、日高川町の広さを改めて実感したと答えておられました。

町長：はい。川辺町で育ち、町の職員を長くしておりまして、川辺の谷々とかは大体、頭に入っているのですが、町内を回ってみると、地図上で見る感覚より

も相当広いです。寒川に出

張所があるんですけど、本庁舎から距離にして40km余りですが、地域性が違います。川辺は、果樹、ミカン

などを中心に発展してきました。中津とか特に美山の方に行けば、林業ですよね

非常にもうかった時代もありましたが、今は木材需要の関係で価格が暴落し、非常に厳しい状況です。1つの町に、これだけ大きな特色があります。この違いは、施策の中でも違いになります。

鈴木：平成の市町村合併で、町域が広くなり、周辺部では不安の声を多く聞きました。

町長：立候補にあたって日高川をさかのぼり、一步、谷へ入りますと、「もうここではうちだけしか残って



山深い地にも人の暮らしが。寒川地区で

ないよ」っていうお年寄り

もおりましたし、そういった人たちが「ここをほらん

という」「忘れないでね」と言われるのがきつかった。この人たちのために、

どうしてあげればいいのか

なっている。

鈴木：町政担当の原点になる言葉ですね。ところで、

増田リポートでは、日高川町は大変厳しい、見通しが示されました。将来的には、消滅の可能性が高い自治体に分けられていました。

町長：そうですね。増田リポートの指摘がなくても人口減少は町の課題で、5つの政策目標でも最優先にあげています。日高川町は、

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー	
日高川町 久留米啓史町長……	1
高齢化の中で、地域から、住民自治を新たに創造する	
橋本市いきいき長寿課課長補佐 石井 義光さん……	5
地域と認知症フォーラム第2部 パネルディスカッション②	
認知症の方を地域で支えあうためにできること ……	8
2017年度和歌山県地域・自治体問題研究所総会	
新事務局長に西岡 敏さん ……	10

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2017年9月号



町の中心部土生地区 診療所・スーパーなどが集中

平成17年に合併しましたが、ちょうど国調の年でその当座1万1300人ほどあった人口が、平成27年の国調では9770人で、約1500人程減っているんです。年に150人減っていることになるのですが、どういふことが推察すると、今まで年に100人以上生まれていた子どもが、60人しか生まれていないんです。一方で、亡くなる方が、年間

180人くらい。あと、子どもたちが大きくなつて、高校を卒業し大学へ行ったり、転出される方が、転入される方よりも30人ほど多いんです。その結果、150人くらいずつ減っていることが分かっていふんです。そう考えると、生まれてくる子どもたちの60人、これをいかにキープし、人口を維持するかに尽きると思っています。

鈴木：高齢化率はどれくらいですか。

町長：高齢化率は日高川町全体では34%ぐらいですけども、美山では47%、中津は40%、川辺で28~29%です。

鈴木：なるほど。

「戻って来いよ」 息子・娘を 送り出す言葉に

町長：人口縮小を行政、住民みんなで考えざるを得ない。私も高校を卒業して一旦、大学進学で外へ出て行ったのですが、大学へ行くときに、常々親から、必ず

戻ってこいという指令を受けて出ていった記憶が、鮮明に残っているんですよ。

だから、町民の方にも「皆さん、悪いけど子どもたちに、必ず戻って来いと言っ

て出してください。どこへ行ってもいいよって言ったら、戻りませんよ。」と言っているのです。実際、私も息子には、「悪いけど戻って来い。できたら近くで仕事があるようなことを勉強しておいで。」と言っ

たら、専門学校へ行つて、今地元でリハビリの仕事もさせてもらっている。でも娘には、戻ってこいとは言わずに、行きたい学校へ行けばと言ったら、戻ってきてないんですよ。だから、地域で、子どもが戻ってこないとか、年寄りばかりになったと言ふ前に、自分たちで子どもを戻すような努力をしてくださって、よくお話ししているんです。

鈴木：大事なものは、帰ってきて、ふるさとで自分は一生涯をここに賭けてみようというふうに思わせる、そういう可能性とか、希望と

か、夢とかを見ることができる場所でない、駄目だと思うんですね。と考えると、やっぱり魅力あるまちづくりです。具体的な人口増、維持対策ですが。

町長：やはり、仕事がないと、食べていけない。最低限、仕事がないといけない。しかし、仕事を日高川町内だけで求めるのも、なかなか難しい話です。今、若い人は、製造業などの仕事だけでなく、ソフト的な仕事というのも望むでしょう。そのソフトの仕事であった役場や農協、銀行が、合併統合等で、門が狭くなつてしまふ就職にくくなっている。学校も生徒数が減つて統合され、ほとんど教職員数も減っている。工場は、いっぱいあるんだけど、地元出身者で働いている方は1割、多いところで2割程度でしょうか。やはり、日高川町だけで考えるんじゃない、最低でも日高圏域で仕事場を求めないと、和歌山、田辺まで行かなければなりません。

ん。今では、和歌山、田辺でも通勤可能ですから、仕事は求められるかなと思います。職場の魅力は地元になくても、生活していく上で何か魅力をつくってあげられればなつて思うんです。鈴木：徳島県の神山町、島根県の海士町、長野県などでは、新しいビジネスをつくり出す取り組みが生まれています。IT関連もある。そういう意味で言えば、この日高川町の持っている、潜在的なものも含めた資源価値がたくさんあると思われまふ。起業、創業を応援する若者対策みたいな仕組みというの、どうなんでしょう。



南山工業団地に増設されたチョコレート製造工場



歴史と文化の町の看板と道の駅 San Pin 中津

地元の資源で産業を 移住者と魅力磨き

町長：多分、日高川町内の中にも、うまく加工すれば、全国展開できるような原始的なものは多分あるんじゃない。ただ、ずっと地元にいる私たちが、気付かないことが多々ある。今インターネットとか移住とかいろんな方が年に10数名、世帯数で8

戸、10戸ぐらい、入ってきてくれているんですよ。そういう方々のご意見も頂きながら、それを磨き上げていくような産業を、ちょっと時間はかかると思いますが、地道につくりあげていくのかなって感じがしますね。

鈴木：移住してくる方々はいま：

町長：以前から中津村の方で「ゆめ倶楽部21」という団体が、活発に活動して、そこへ行政も絡んで移住とか、農家民泊とか、体験型観光であるとか、そういったことを積極的に展開してくれております。去年の実績でいくと、大体9世帯13人の方が日高川町に移住していただいてるんです。

空き家が増えているので、空き家を地域資源として、積極的に移住する方に提供したりしております。ただ、所有者の意向もあって、空き家の確保と活用はなかなか難しいのも事実です。

鈴木：子育て対策は如何でしょう。

町長：医療費は、18歳にな

って年度末まで無料です。給食費の無料化は、組合立の学校の関係から難しい部分があつて、無料化という形にはなっていないですね。それで、対象の方に、町内で使える商品券をお配りし助成する形で、ここ2年ほど対応しています。

鈴木：魅力のあるまちづくりということについて、町長は、どんなふうにお考えでしょうか。

町長：魅力って何なんだろうなっていうのを改めて考えてみると、普通に考えたら、田園風景、星がきれい、蛭が飛ぶ、自然が豊かかっていう、ありきたりなことだけど、ほかにないものといったら、そんなものかかっていうイメージです。

鈴木：実は自治体問題研究所では、この2年ほど、和歌山県内に移住してくる若い世代を中心とした調査を行ってきました。そのなかで、若い世代があげた魅力に、自然や食べ物などのほかに、コミュニティがありまし。自分の居場所がある、居心地がいい場所です。

町長：そこに住んでいると当たり前なことが、案外と外から見たら魅力があるんじゃない。ですから、地元で育った若い人たち、移住等々で来られた方、地域おこし協力隊の方もおりますので、そういった若い人たちと、日高川町の魅力について、そこを伸ばす方法は何か、じっくりと練ってみたい。良ければ、それを前に出せばいいと思いますね。

若手職員・

女性職員と対話

人ほどの職員がいるのですが、本所とか両支所の職員ぐらひは、機会を見付けて、ふだんの会話をしながら、どういうことを今思っているか、どういうことをしようとしているか、繰り返し話し合っていくことによって、彼らはもつと頑張ってくれているだろうなという思いがします。

鈴木：定期的に、町長と若い世代が語るような、町長と女性職員が語るような場を。

町長：つくりたいとは思っています。ただ、身構えさせないために、少しコミュニケーションを先に取る方がベストかなと思います。ある程度コミュニケーションが取れた中で、一度集まって、このことをみんなどう思うかって投げかけ、自分らで消化して、また、集まって話をする方がいいかなという気はするんです。

鈴木：女性職員はいま、どれくらいおられますか。

町長：保育士さんも多いですから、女性職員は4割程。最近の傾向として、採用試



日高川町役場の執務風景

験をしたら、成績の上から採れば女の子の方が、採用される確率が高いです。

鈴木：つまり、女性職員は増えていると。

町長：増えていますね。

鈴木：町長が進めていく、まちづくり、やはり長い時間生きることになる若い世代の活躍が大事ですね。

町長：それは大事ですよ。

意見を聞くっていう話のレベルでも、若い人の考え方っていうのは必要ですし、

住民さんの中に飛び込んで、何かまとめていくにしても、若い人たちがどんどん中へ入っていったら、そこで事を進める方が、将来楽しみだなっていうふうに思いますね。

鈴木：最後に、向こう4年間、是非実現していきたいというふうにお考えになつていくこと、どういった町政を推進していくのか、お伺いできたらと思います。

高齢者が元気で活躍するまちを目指して

町長：一番最初のお話に戻るんですが、私、無投票当選をさせていただいたっていうことで、このこと自体重く感じているんです。投票していませんから、私を支持してくれた方がどれだけいるのか、私の出した5項目が、どれだけ皆さんに支持されているのか見えななんです。皆さんが、私を応援してくれているという考え方もありますが、対抗馬がないので、選択肢がなかったと言われたら、支

持者がいないということもあり得ます。自分になった以上、4年間どうするのかという、掲げた5つのことを、できるだけ実現に向けて前へ転がす。できること、できないことはあると思うんです。ひよつとしたら5つともできあがってないかも分かりません。でも、前へ転がすという行為を誠実にすることが、私のこの4年間に与えられた責務かなというふうに思っています。そういう意味で、この4年間を一生懸命、住民の皆さんのために尽くせばなと思っています。その中で、1つだけ気になるのが、高齢化率が高くなつて、65歳以上の方がもう3分の1を超えているという現実ですね。でも、65歳以上の方でも、元気な方がいっぱいあります。若い人に頑張れという以前に、人口に占める割合の大きい元気な高齢者の皆さんに、町のため

をつくっていききたいなど、今、思っているんです。

鈴木：なるほど。

町長：私、社会教育もしていた経験もあるし、保健福祉の方でも長く勤務しておりましたので、元気なお年寄りについていうのは、やっぱり何か仕事をしながら、社会貢献的な、ボランティアであったり、文化活動であったり、スポーツであったり、いろんなことにチャレンジされている方は、元気に年を重ねますね。そういう人たちをつくらないと、こんなちっちゃな町では、医療費がもたせません。社会保障費ばかりになって、したいことができなくなりまして、できるだけその人たちも元気で、病気や介護の期間をできるだけ短くしていくような手立ては、人口を維持するという意味でプラスになるので、そこに力を入れたらいいと思っています。

鈴木：今日は、若い世代が魅力を感じる町をどうつくるか、重点的に伺ってききましたが、町長がいま言わ

れたように、団塊の世代も含めた高齢世代を、人的資源として活用することは重要です。どのように高齢者の出番、活躍の場をつくるかですね。

町長：はい、そうです。

鈴木：社会教育の現場でありコミユニティの拠点でもある公民館の活用はどうでしょう。

町長：公民館というのは、社会教育における学校的な存在です。行政の各課が進めている事業は、社会教育上も課題、地域課題でありますので、単純にカルチャーになるのではなくて、地域課題をもっと取り入れた社会教育、生涯学習であってほしいと思っています。それが公民館だというふうに私は認識しています。

鈴木：人口減少、少子高齢化、地域コミュニティが変わる中で、学校とともに公民館は大切な拠点だと思います。地域を活性化する場として、是非位置づけていただきたいと思います。長時間になりました、今日はありがとうございました。

高齢化の中で、地域から、 住民自治を新たに創造する



石井義光課長補佐(いきいき長寿課)

橋本市いきいき長寿課課長補佐 石井 義光 さん

和歌山県地域・自治体問題研究所の阪辻博文理事が、橋本市いきいき長寿課の石井義光課長補佐に市の高齢化等の現状と課題そして、その解決に向けた取り組みについてインタビューさせていただきました。

阪辻：いきいき長寿課とは、どんな業務をされていますか。

石井：いきいき長寿課には高齢福祉係と地域包括支援係、2つの係があります。高齢福祉係は、高齢者の介護予防の推進や生きがいづくりの支援や在宅高齢者の生活支援などを行っています。地域包括支援係というのは、橋本市に1か所、直営の地域包括支援センターがその係になっています。そこには社会福祉士、保健師、ケアマネジャーの専門職が配属されて、高齢者の

いろんな相談に携わっています。高齢者の全体的な総合相談支援機関として、また介護予防ケアマネジメン

と業務を行う機関として高齢者の生活を支えています。や医療・介護施設といった地域の資源が不足して、高齢者のニーズや課題などに十分答えられないことが予想されています。それに対応するには、どんなふうにしていかなければならないのか、という問題に直面しました。

たすけ愛♡はしもと
フォーラム開催！

阪辻：7月8日、「みんなで創ろう たすけ愛♡はしもとフォーラム」に取り組みまれましたが、開催趣旨とその成果とか御感想をお尋ねします。

石井：高齢になっても、やっぱり自分が住み慣れた地域で、ずっと暮らし続けられたら良いのになあと、多くの方がそういうふうに願って、当然のことだと思います。高齢化が進んでいく中で、介護が必要、支援が必要になる方が増えていく、その一方で、それを支えていく側の、公的なサービス

が出てきました。そういう課題に行政がすべて対応できるのかというのは、橋本市の現状を考えたときになかなか難しい。

住み慣れた地域で、
ずっと暮らし続けたい、
その願いに応えるために

それぞれの地域によって、必要とされる支援が微妙に違うので、地域の実情に応じた支援をしていくために、それぞれの自分たちが住んでいる地域の課題を話し合う場、「第2層協議体」を地域の中でつくっていく必要があるということになったのです。

今年の3月29日に、市全体のそういう仕組みを考える組織ということで、第1層協議体を立ち上げたのです。その第1層協議体を愛称「たすけ愛♡はしもと」と呼んでいます。

市全体を考え協議を進める組織ができたので、今度からは、それぞれの生活圏域、適正な規模かどうかは別として、おおむね公民館単位



みんなで創ろうたすけ愛♡はしもとフォーラム

で、(第2層協議体と呼んでいる)組織をつくっていくきっかけにしたいということ、このフォーラムを開催した訳です。

身近な地域で「協議体」を作るきっかけになったフォーラム

阪辻：まず第1層といわれる協議体が3月にできて、これから地域ごとに第2層をつくっていく契機として、今度のフォーラムが取り組まれたということです。

それで、この取り組みの成果について、石井さんはどうお考えですか。

石井：従来と違って今回は、動員的なものはかけませんでした。にもかかわらず、

340名以上の方が聞きに来てくれたところが成果の1つだと思っています。まだアンケートの集約ができていないので、総括はできていないのですが、これから橋本市のまちづくりについて知ってもらえたこと、もともと橋本市民はボランティア意識が高いほうだと思っていますが、ボランティア意識の高揚と新たな人材発掘にも役だったのではないかと思っています。

阪辻：橋本市の高齢化、それとの対比で、少子化とか、

若年年齢の人口とかの現状について、お話しください。

石井：個人的には、高齢化がすべて「悪」でもないような気もしています。生きがいを持っていろんな活動をし、生活する、健康寿命を延ばすことで介護予防になったりする。高齢化は別に悪いことではないという思

いも持っています。当然、高齢化が進むと介護保険の給付の増加や医療費の増加など、行政上の課題が出てくることはありますが。

今年の3月の数字で言うと、高齢化率は30・1%、10年前は21・2%です。約10%、上がっています。一方で、出生数は平成28年度で419人、平成18年度で528人です。全体の人口は、29年3月末、6万4150で、平成19年の3月末で6万9374、約5200人ぐらい減少。年間にして約500人ずつ減っている計算になるわけです。

阪辻：高齢化に伴い、こういう問題が出てきて、行政がそれにどう取り組んでおられるのですか。

高齢者が特技を生かして、助ける側に、そして生きがいに

石井：そうですね。高齢者の人は、すべての人が助けられるばかりでなくて、ある部分では助ける側になれるものなのです。助けるこ

とで「ありがたい、助かったわ」と言ってもらうことで、生活に張りあいが出て、元気になって生きがいになる。何か文章を書くのが上手だとか、絵描くのが上手とか、そういう特技を使っ

が定期的に集まることによって顔見知りになり、「最近あの人来てないね」と言い合ったり、欠席したら、ちよつと電話をかけて声かけをしたりして、地域の中で、さり気ない「見守り」や生きがいづくりが行われ、地域づくりに繋がっていると思います。

阪辻：高齢者が地域で、グループを組んだり、NPOを組織したり、そういった高齢者が集まって、生き生き活動しておられる例があったら御紹介してください。

次に地域ふれあいサロン事業、この事業は地域の高齢者が気軽に集まることで閉じこもりや寝たきりを予防するために定期的に集まって、そこでお茶飲んで話をしたり、介護予防の体操をしたり、手芸をやったりする場所が、44か所あります。参加延べ人数2万6439人(実人数1289人)です。地域の住民の方が主体となって運営してくれているのが、このふれあいサロンということになります。

石井：約10年前から、「げんきらりー自主運営教室」といって、「わかやまシニアエクササイズ」という、和歌山大学と県が共同で進めている体操、介護予防の体操を始めています。市内に40か所の自主運営教室ができており、年間、延べで3万7763人(実人数1244人)が参加しています。これは介護予防になるだけではなくて、みんな

老人クラブは、だんだん減ってきているのですが、3月末現在で市内に100クラブあります。「げんきらりー」の自主運営教室や、ふれあいサロ



げんききらり教室

ン、老人クラブなどの地域の集まりに、いきいき長寿課から介護予防教室という出前教室を行っています。

昨年度で95回、地域で開催し、51団体、1,923人の方に参加いただいています。あと、ロコモ予防という、腰痛とかひざ痛の予防体操の自主運営教室も、橋本市保健福祉センターの3階で実施しています。

阪辻：そのほか、橋本市の高齢者を取り巻く課題とか問題、例えば、認知症の問題であるとか、何かお考えになっていることはございませんか。

認知症の正しい理解から、 始まる取り組み

石井：寿命が延びてくる中で、当然、認知症になる方が増えてくるのは、これは間違いないことなのです。そんな中で、住民に認知症を正しく理解をしてもらうために、認知症サポーター養成講座を開催しています。橋本市では、昨年度31回開催して、700名以上の方が参加をしてきています。

スーパード、金融機関、タクシー会社、バス会社などの民間の事業所や、不特定のいろんな人と接する機会のある方に、また、小学生にも講座を実施しています。認知症を正しく理解してもらい、ちょっとした手助けがあったら、認知症の方やその家族の方も、安心して暮らすことができることに繋がっていきます。認知症になっても安心して住み続けられるまちづくりを進めるためにも、この養成講座を開催しています。

さきほどの「協議体」の

話にもつながってくるのですが、まだまだ認知症に対する理解が進んでおらず、家族が認知症になれば隠しさがり、周りの人に言いにくい状況です。「うちのおじいちゃん、おばあちゃん」が認知症なんです。見かけたらちよつと声かけて、連絡してほしい」、地域の中でそういう話ができるような地域になれば良いのになあという思いがあります。

九鬼：この間、自治体での大きな取り組みに人口減少社会に歯止めをかけるために、人口を減らすのを抑え、人口を増やしていく方策を示す、「人口ビジョン」や「総合戦略」を作ってきていますが、その総合戦略の中に、このまちづくりの問題はどう位置付けられていますか。

協働のまちづくりはひとつ、 各部署は連携して

石井：そこは詳しいことはよく分からないのですが、ただ、今回の第1層協議体「たすけ愛♡はしもと」を、

立ち上げるに当たって、いきいき長寿課、高齢福祉の担当課だけがやっていて良いものではないと思ったのです。地域の中は、高齢者の人だけが住んでいるわけでは絶対ないので、いろんな世代の人が住んで初めて1つの地域を形作っています。結局、地域づくり、街づくりへとつながっていくので、第1層協議体の事務局には政策企画室も並列で入ってもらっています。

結局は、協働のまちづくりというところにつながっているとと思うので、市民の側から見えてわかりやすく取り組みやすくする上でも、ばらばらにやるのではなくて、行政の各部署が連携して、一緒に取り組む必要があると考えています。

阪辻：最後に、橋本市のまちづくりで、石井さんの今後の抱負、展望みたいなものを聞かせてください。

職員はもつと地域に入って、 住民の信頼を

石井：役所も、良い意味で

どんどん地域へ入って、きめ細やかに、一緒に考えて「これは、できますが、こはしんどいです」と率直に地域の人たちと言える関係を作って行けたら良いと思っています。何回もその地域に入って話をして、「よう分かったよ」と言ってもらえるようになる必要があると思っています。まだまだ地域と距離があつて、今後も取り組みを進めていく必要があると思っています。

まちの主人公は住民です。まちづくりの主体になるのは住民の方です。住民が元気になるようなまち、住んで良かったまち、橋本を未来へ、自分の子供とか孫とかにも引き継いでいけたら良いと思います。

阪辻：くみ尽くせない地域の良さを生かして、新たな住民自治を地域から築き上げていけるのだと思います。

これからの橋本市のまちづくり、石井さんの活躍に期待をして、インタビューを終わります。

地域と認知症フォーラム第2部 パネルディスカッション②

認知症の方を **地域で** 支えあつたためにできること

今回は、前号のパネルディスカッションの第2弾として続きを紹介します。金川さんのコーディネートにより、まず会場からの質疑応答のあと「認知症の方を地域で支えあつたためにできること」について、4人のパネラーと助言者の永田先生から発言していただきました。

金川：フロアの方から、何か御質問等ございますでしょうか。

認知症予備軍の経験 交流の場が欲しい

Y：橋本から来ました。私は、今から2年余り前に、認知症予備軍と診断されてびっくりしました。そのとき先生から薬を飲むか飲まないかはあなたの自由、しかし、まだその程度やと。薬飲まない方法はないかと尋ねたら、方法がありますと、7項目指摘されました。トップに言われたのが、毎日いろんな人と交流したり話をするのが一番大事と



Yさん

言われたんです。それまで農業を中心にしていましたので、働くこと中心の人生でした。それで私は、働く人生から、楽しく生きる人生に価値観の転換を図りました。かなり努力しているんですけども、2年間でそれほど進んだように思いません。しかし、どのように進んでいくのかということが一番不安です。2つ目は、薬を飲むか飲まないかというのも不安です。やっぱり薬の弊害も考えますから。あと1つ、認知症予備軍、認知症者を含めて、不安を語り合えて、経験交流を図れる場が欲しいんです。市役所の保健師さんにも、予備軍の会をつくれんかなあと話をしにいったこともあるんですけども、プライバシーの問題があつて、認知症予備軍の名簿がつくれないというのですが、何とかできないか、あつちこ

つちへ働きかけしてるんです。先ほど先生が、認知症の人の話し合いの場が至る所でやられてると言われましたので、私はつくれると思うんです。一番問題になるのは事務処理することなんです。私は、事務処理が徹底して衰えていますので、そういう援助を、行政の方からいただけたらと思います。

金川：ありがとうございます。Yさんから御提言を頂いたので、永田先生の方から、アドバイスとか、ヒントになるようなことがあればお願いします。

永田：認知症予備軍の人が本格的な認知症に移行するのは3割程度とか、実は脳の病気に伴う変化というのは未知数が多い。大事なのは、認知症予防するのも大事なんですけど、これからの人生をどういうふうに生きていくのかの方が大事で、先生の指示を頑張つてやりながら、仕事もやりながら自分の人生、こんなに楽しい時間をつくることもできるということ。予防が目的ではない。これからの人生

をどうより良く生きていくのかということを行政がきちんと方向付けしないと、予防が過誤を生む危険性があると思います。

私たちが、各地でやっている本人ミーティングも、「一緒に話し合つて、楽しい人生にしていけないか」と本人が呼びかけ文をつくつて、いろんな人たちが手渡しとか、保健師さんから伝えてもらつて、仲間を増やしています。お近くの保健師さんに、事務的なことをお願いできないか、あるいは介護事業所の人たちの力を借りて、事務局的な人を仲間にしていただけたらいいなと思いました。

金川：あと1人、お願いします。

第7期 介護保険事業計画に 意見を入れる方法は

U：私は高齢者の生協「おたつしや倶楽部」という介護ケアを運営しております。ある市町村で第7期の介護保険事業計画に合わせ、事業計画に入れていた



パネラーの皆さん

だきたいので、いろいろ教えてくださないと勇気を持って行きました。介護事業計画を考える課へ1回、もう1回は、包括的な地域づくりを考える課に行つて、お話をしたんですけども、ま



うさん

だ、いいね何も言っていただけでなくて、どんなふうに進めればいいのか、勇気を持つて発言させていただきました。

金川：ありがとうございます。行政マンとして、もしこういう人がいたらどうなのか、感想を頂ければと思います。

谷口：行政として背中を押しているのは、スタッフの方が現場を大事にして、現場の実情を詳しく教えてくれて、この地域ではこういうことが困つてると具体的な例を持つて行けば、行政側も動きやすいかなという気はします。

金川：馬谷さんにもひと言お願いします。

馬谷：私としましては、地域の皆さんの意見や、事業所の意見というのは、ほんとうに大切にしなければならぬ貴重な意見だと思

ます。自分たちの事業に取り込めるように、「事業計画にうたっていますよ」などと頑張つて上司に言うこともあります。

金川：ありがとうございます。大いにヒントになったと思います。

パネラーの皆さん方に、あらかじめシンポジウムを受けて、認知症の方を地域で支え合うためにできることを考えて頂いています。谷口さんから順に発言をお願いします。

認知症になる 不安を学んだ

谷口：今の仕事の原点になった出会いは、当事者の御夫婦が、認知症になったことが悪いのかつていうことを言われたので、認知症になつても安心して、こういうことができるんだと思つてやつてたんですけども、認知症になる不安があるというところが今日すごく勉強させていただきました。あと、永田先生がおっしゃるように、認知症にならないようにという予防が医学

的にはできないので、認知症になつても安心できる取り組みを今後進めていきたいなと思っています。

本来の ケアマネジメントは 亡くなったら終わり じゃない

志水：さっき自分にとってケアマネジメントとは何ですかつて質問あつたんですけど、ケアマネジャーつて、個別に担当を持つんですけども、例えば認知症の方で、こういうことが困つてるところで自分たちが支援に入つたときに、次の支援のときに社会的な問題にならないようにケアマネジメントしていく。それを地域でどうしていくかを考えていくのが本来のケアマネジメントかなと思つています。なので、入所したから、亡くなつたからつてケアマネジャーが終わるんじゃないくて、今後、御坊市やいろんな市町村において、どのようにしていくのかとどののを考えることも本来のケアマネジメントかなあ

と思います。

制服脱いだら 一住民として 認知症サポーター

玉置：今日は事業所という立場で来させていだいたんですけども、事業所の制服脱いだら一地域住民という事で、私も認知症サポーターになつてゐんです。認知症サポーターとして、この事業所で仕事してる以外でも、隣近所の人困つていたら、いろいろ助けてあげたいなと思うし、仕事やから支援するとかじゃなくて、一人の人間として人を支えていくというところをしっかりと大事にしていきたいなと思います。

諦めないで、 より良い状態に なるように

馬谷：先ほど橋本市から来られた認知症予備軍の診断されてるつてお話ししてくださいます、永田先生の講義の中で、どの状態でも諦めないで、より良い状態

になるようにとあるんですけれども、私も明日から、また町民の皆さんに、機会があったらお話したいなと思います。

とにかく
つぶやいていると
一緒にやりたい人が
つながってくる

永田：今それぞれの立場でやるが増えていて、行政の人もお医者さんも介護職も民生委員の人も住民もみんな忙しい時代になっていて、プラスアルファ何かしようなんていうとすごく負担で引いてしまう人が多くと思うんですね。だから何か新しいことをやるというよりも、今までの延長線で一緒にやれる何か新しいものをつくる時代。何か特別な新しいことをやるというよりも、みんなの共通で一緒にやりたいことで折り合いを見付けて、一緒にやるという場面をつくり出すことが必要じゃないかな。アクションを一緒にやるミーティングを各地でやっていると、お医者さんも行政も、

小さいまちだと首長さんと一緒に出てきて、こんなまちにしたいね、こんなことやれたらいいね、あつてほしいまちの姿や、やりたいこと、自分が楽しくなること、共通のこといっぱいあるので、立場や職種を越えて、人として付き合う場面づくりを続けていくことではないかな。付き合つて、この人は仲間だと思つと、ちよつと大変な案件でも相談すれば、お前が言うならよしやろうという人たちが増えてくるのが、壁を突破していくことになると思います。こんなことしたいなあつていうのを、とにかくつぶやいていると一緒にやりたいねつていう人がきつとつながつてくると思うので、是非、行政の人にもつぶやき続けていけばいいんじゃないかなと思います。



2017年度和歌山県地域・自治体問題研究所総会

新事務局長に西岡 敏さん

皆さんに支えられて頑張りますー

決意を語る



柳田理事が提案した。

経過報告では総会時におけるフォーラム「誇りがもてる地域を語る」での若手職員の元気をアツピール、今回はじめて取り組んだ自治研ブロック交流集会、海南市の財政分析、さらに首長インタビューなど報告。活動方針として自治研の担い手づくりをどう進めるか、「わがまち総合戦略」の説明会の要請、地域課題による事例研究会、自治研30周年を迎える準備などが提案された。

総会は西岡理事の司会で始まり鈴木理事長の挨拶（7・8合併号）の後山下理事を議長に選出。経過報告及び活動方針（案）を九鬼常務理事、決算報告書及び予算（案）を杉谷副理事長が提案、新役員については

新役員は次のとおり。

事務局		理事	
事務局長	顧問	監事	理事
柳阪山九根西岡 田辻下鬼来岡	西山西岩中藤仲窪柳上松阪西増宮石山野雑尾九根西岡島谷	大杉英裕 正尚	鈴木英裕 大杉正尚
孝博紀修 二文和堅一敏	純茂孝浩一 一樹均穂明樹玄志	健孝弘知博良 健文紀富光昌	修正英裕 一敏尚